

工学部の開設

一九四八（昭和二十三）年七月三十日、財団法人中央大学理事長加藤正治は文部大臣森戸辰男に、学校教育法第四条にもとづく新制の「中央大学設置認可申請書」を提出した。その目的は、「法律学、経済学、商学並に工学に関する理論と応用とを授け、其の蘊奥を攻究せしめる」こと、また一般教養の諸学科を教授して個性豊かな人間形成に努め、社会文化の創造と進展とに貢献することとされた。

これにより、法学部・経済学部・商学部（昼・夜間部）と並んで工学部（昼間部）が翌年二月二十一日に認可され、新制大学として四月一日から開講された。

実は、工学部の増設は四五年に挙行されるはずであった創立六十周年記念事業の一環として計画されていた。しかし、折からの戦況の悪化と四三年十月の私学統廃合政策に直面したため、機械科・航空機科（四五年十二月、工業物理学科に改編）からなる中央工業専門学校を四四

授が就任（兼任）したほか、土木工学の第一人者であった横井増治工学博士（元京城大学教授）ら主として東大工学部の関係者が招聘されて、その陣容が整えられた。

西村教授は、「敗戦日本が自立していくために工学部の使命は大きい、国土計画のための土木工学、輸出振興のための精密機械学、工業全般にわたる電気工学、復興促進のための工業化学が必要とされる」とその抱負を語り、さらに「実験設備は私立大学では優秀なもの認め



工学部水道橋校舎

られるが、今後なお二、三年間に各学科の実験設備の充実を期待している」と、「中央大学新聞」二八三号で述べている。その後、五〇年四月には

年に設立することとなる。新制工学部は、この中央工業専門学校の廢校を前提として開設されたのであった。

ところで「中央大学設置要項」によれば、工学部は、東京都下府中町本刈道九九〇番地に置かれることになっていった。四七年から翌年にかけて、本学は同地にあった府中製作所の工場を買収・改築して中央工業専門学校に充てる計画を進めていた。新制工学部の新校舎は、この土地に建設されるはずであった。

しかし、この買収計画は、結局実現には至らず、工学部は駿河台校舎のわずか四教室を実験室に充てて開講することとなった。当時の「学則」によれば、工学部には土木工学・精密機械・電気工学・工業化学の四学科が置かれ、その総定員は八〇〇人と規定されている。開講時の教室不足は、深刻な問題であった。

また開設当初の工学部専門科目の教授陣には、工学部長事務取扱に精密機械学の西村源六郎東京大学工学部第二工学部（夜間部・総定員六四〇人）も開講した。五一年度から五三年度の工学部（昼・夜）の在学生数についてみると、八三〇人、一、二一四人、一、三二〇人に増加している。

この増加に対応して工学部の充実を図るためには、新たな施設を整えなければならなかった。そこで五一年三月、本学は工学部用地として文京区小石川町に校地八、〇四三坪（現後楽園キャンパス）を購入し、次いで水道橋駅近くの高台にあった同和鋳業所有のビルを購入して、それを工学部の教室として使用することとした。

工学部は、同年十二月に改修を終えた同和ビル、すなわち水道橋校舎（御茶ノ水校舎）に移転し、翌年一月には工学部移転祭を行った。この水道橋校舎への移転は、工学部にとって本格的な教育・研究活動をすすめていくための第一歩であった。

五三年、新制工学部第一回卒業生として一七一人が実社会に向けて巣立っていったが、彼らはこのような草創期の不十分な設備環境の中で四年間勉学に励んでいたの